

習作期の太宰治文学

—高校時代を中心に—

藤原耕作

(大分大学教育福祉科学部国語科教室)

【要旨】 本稿は、太宰治の習作を素材として、太宰治文学成立の過程を跡づけることを目的としている。中学時代の習作で、太宰は、内面と外面という二項対立において、あえて外面を重視するという姿勢を見せつつあった。それが太宰治文学成立への第一のステップであったと、本稿は位置づけている。高校時代の太宰は、マルクス主義との出会いをきっかけとして、試行錯誤を重ねた末、大学進学後に発表した習作で、栄えと滅びという二項対立において、あえて滅びを選択するという可能性を見出すという戦略を編みだしている。それが太宰治文学成立への第二のステップであったと、本稿は位置づけている。

【キーワード】 太宰治 習作 高校時代 大学時代

一 はじめに

先に私は、「習作期の太宰治文学—中学時代を中心に」^{注1}(以下、前稿とする)において、太宰治が中学時代までに書き残した文章について検討した。そこで確認したのは、当初は菊池寛や芥川龍之介の文学の露骨な模倣から出発した太宰文学が、「侏儒楽」「將軍」(大正十五年)あたりを境にして、少なくとも外面/内面系のテーマにおいては〈太宰治〉^{註2}への飛躍のきっかけをつかみかけていたということである。前稿の末尾では、このテーマの拡張の過程が作家〈太宰治〉の誕生の過程であったのではないかと推定しておいた。本稿ではそれを受けつつ、太宰治の高校時代から大学時代にかけての文章を検討していきたいと考えている。

ところで、「習作期」として一括しているが、太宰の中学時代の習作と高校時代・大学時代のそれとの間には、連続しているものもあるにせよ、無視できない大きな断層がある。それをもたらしたのは、太宰自身の成長も勿論あるだろうが、それと共に、時代の流行思想となっていたマルクス主義思想やそれを理論的支柱とするプロレタリア文学との出会いであったと考えられる。周知のように、太宰は青森を代表する大地主の家の生まれだが、マルクス主義的な立場からそれを見れば、革命によって滅ぼされるべき階級の出身者だということになる。その事実は太宰に階級的な〈憂鬱〉^{註3}とでもいうべきものをもたらしたようで、高校時代以後、太宰文学のトーンは、明らかに〈憂鬱〉^{註4}なものへと変化している。

そこで、まず私たちは、太宰の文章の中に、初めて〈憂鬱〉(=melancholy)が生まれ出る現場に立ち会うことから、この論をはじめることにする。

二 〈憂鬱〉の誕生

昭和二年四月に弘前高等学校に進学した太宰は、翌年五月に『細胞文芸』を創刊するまで作品を発表していない。しかしその間に、英語の授業時間に書かれたと推定されている、十編の英作文を残している。本稿の視点から、その中で最も注目に値するのは、六月中旬から下旬頃に書かれたと推定されている「A very brief history of his first half life. (Not biography, because he has still his future.)」(以下「A very brief history of his first half life.」^註である。この英作文は、太宰の幼少期を描いた習作期の文章として、前稿で取り上げた高小時代の綴り方「僕の幼時」と双壁をなすものである。「僕の幼時」が虚構意識の稀薄な記述であったと考えられるのに比べ、「A very brief history of his first half life.」の方には、タイトルに「his first half life」とあるように、自分自身を「彼」として描いていることを始めとして、濃厚な虚構意識が観察できる。この英作文の「彼」は、高校入学後の現在、〈憂鬱〉に襲われているという (now he is attacked by doubtful melancholy.)。これはおそらく、そのまま高校入学後の、この英作文を書いている時点での太宰自身のことだと考えてよいだろう。そして、この〈憂鬱〉というフィルターを通して太宰自身の過去が再構成されていく、というのがこの文章の基本的な虚構の仕組みであると考えられる。つまり現在の〈憂鬱〉に見合う形で、過去が発見・創造されていっているのである。その方向性は基本的に一貫していて、「彼」を「The lone sickly boy」として描こうとするものであるといっている。たとえば、両親から悪性の病 (malignant illness) を受け、近隣の子供の中で最も体が弱かったこと、そのために学齢に達しても中学校に行けず、保養地で健

康を養い、一年遅れで進学したこと、などの虚構は、すべて「彼」が「病弱」(sickly)であるという側面と関わっている。また、七歳の時に水戸の叔母のもとへやられ、水戸中学に進学したが、ホームシックに耐えかねて青森に逃げもどってきたという虚構は、それに続く、青森に戻っても幼なじみは訪ねてこず、青森中学に入っても友達を作るのに失敗したという記述を見れば明らかなように、「彼」が「孤独」(lone)であるという側面と関わっていると考えられるのである。ちなみに、幼少期の現実の太宰は、彼自身がその時期に書き残したのもや周囲の人々の証言を見る限り、「病弱」でも「孤独」でもなかった。そのことから、「病弱」で「孤独」な幼少時代という虚構は、現在の〈憂鬱〉から逆に再構成された過去であるということがわかるだろう。

〈憂鬱〉の誕生は、中学時代までの太宰の習作と高校時代以後のそれとを、截然と分かつ重要な出来事である。何がそれを彼にもたらしたのかは、この英作文からだけでは何とも言えないが、私はマルクス主義との出会いが大きかったのではないかと考えている。また、この英作文は六月頃に書かれたと推定されているが、注でも述べたように、夏休み明けに書かれた蓋然性が高いと私は考えている。となると、七月二十四日の芥川龍之介の自殺よりも後ということになるが、「doubtful melancholy」という奇妙な言葉^註は、芥川の「ぼんやりした不安」を思わせはしないか。影響関係の有無はともかく、芥川の「不安」は階級的な「不安」としての側面を持っていた。太宰の〈憂鬱〉も、それと共通する震源を持つていてのではないかと思うのである。

ともあれ、太宰の習作への、マルクス主義及びそれを理論的支柱とするプロレタリア文学の影響は、翌年、同人雑誌『細胞文芸』を創刊し、創作活動を再開してから、顕著な形であらわれてくることになる。

三 『細胞文芸』の頃

高校進学後、一年あまりの間、作品発表を休止していた太宰は、二年に進級した昭和三年五月、同人雑誌『細胞文芸』を創刊し、活動を再開した。中学時代の太宰の創作活動は順風に恵まれたもので、主な発表舞台であった同人雑誌『蜃気楼』は十二号までその号数を伸ばしたが、それとは対照的に、高校時代の創作活動は終始逆風で、『細胞文芸』も九月に第四号を出したところで廃刊となった。当時の太宰の忸怩たる心境は、のちに「猿面冠者」（昭和九年七月）「喝采」（昭和十一年十月）などで作品化されている。

『細胞文芸』に発表された太宰の創作は、「無間奈落」（昭和三年五月・六月）「股をくぐる」（昭和三年七月）「彼等と其のいとしき母」（昭和三年九月）の三編で、いずれも辻島衆二名義で発表されている^{注五}。また、辻島（辻嶋）名義で、「編輯後記」を担当している。英作文「A very brief history of his first half life.」で生じた〈憂鬱〉は、『細胞文芸』に発表された習作を覆っているが、それが太宰自身のものでもあったことは、創刊号の「編輯後記」にも、「本号の編輯で僕は始から終迄憂鬱でどうもをかしかつた」という形であらわれている。最終号である第四号の「編輯後記」には〈憂鬱〉という言葉こそ出てこないが、「つらい思ひ」「不安」「淋しく」「苦しい」などの言葉が散見され、グルミーな雰囲気立ちこめている。

さて、『細胞文芸』期の太宰の習作で、まずおさえておきたいのは、当時時代の流行思想となりつつあったマルクス主義やそれを理論的支柱とするプロレタリア文学に対する太宰なりの反応が、はっきりとした形をとってあらわれはじめているという点である。「無間奈落」については、「悪徳地主の偽善をあばくこと」によって傾向小説たらしめ

ようとした」（相馬正一「初期習作」^{注六}）、「左翼思想の擡頭を背景に生家を告発した」（川崎和啓「無間奈落」^{注七}）という指摘があるように、生家をモデルとしたブルジョア階級の家庭の退廃や悪徳を剔抉したということ、そしてその一方で、「浅公は此の瞬間、生れて始めて主人に対して侮蔑の念を感じる事が出来た」という部分や「人の母と成つて彼女（おさだ）はあの周太郎の薄情に幽かながら気がつく程の強さを、始めて持つことが出来たのではなからうか」という部分にあらわれているように、階級的矛盾に気づきかけた「下男」や「女中」の姿が描かれていることなどに、そのあらわれを看取することが出来るだろう。「無間奈落」の連載が、「或る意外な障礙」（おそらく生家からの反対）によって中絶されたこともあって、次の「股をくぐる」を「左翼小説」からの「一時撤退」（川崎和啓「股をくぐる」^{注八}）とする見方もある。しかし、朝から何も食わずにいる韓信が、老婆が彼に与えようとする「一塊の粟飯」をめぐる「あの婆にだつて今日食ふべきものはたつたあれだけしか無いんだ。婆にはあれが必要なんだ。それを俺に呉れる。するとどうなるか。（略）結局は、何時迄たつても貧乏人は減らないといふ事になる。此れはどうか成らぬものか」と考え込む場面や、「此の町の屠殺場の青年等」についての「この青年等は、或る物質の不思議な窮乏の為に今はもう『慎ましやか』といふ事を全然没却しねば成らなくされて居た。この貧困なる青年等は、彼等の腹に有る事を残らずさらけ出して、常に無茶苦茶に暴れ廻つて居るのであつた」という記述を見ると、この作品にも「無間奈落」と同程度の「左翼小説」的要素があることに気づくはずだ。「彼等と其のいとしき母」については、相馬正一「初期習作」に、登場人物である母子を「中産階級」として登場させたことに「太宰の階級意識」が働いているという指摘がある。この指摘は、作中の「兄も中産階級の惨めさを人一倍感じて居た。成程生きる為に生きて居る人間も悲惨だ

らうが、世間体の為に生きて居る人間は、もつと悲惨だと兄は言ふのだつた。世間体の為に生きて居る人間——それは中産階級に最も多いのだとも語つた」という記述を主に踏まえたものであろう。五十嵐誠毅『太宰治〈習作〉論』¹⁹⁾はこの記述に「マルキシズム思想」の「発想」をみるとともに「芥川龍之介のひき写し」だとしている。

この中産階級の没落などという発想は明らかにマルキシズム思想のものであり、直接的には、芥川龍之介のひき写しです。芥川は、『大導寺信輔の半生』に、「中流下層階級」の貧困が、その世間体のためにいつそう惨めなものになっている、と書きます。

芥川文学の、太宰の習作への影響は中学時代から顕著であつたが、ここではその影響の内幕が「階級」に関わるものに変化していることに注意しておきたい。太宰の〈憂鬱〉が、芥川の「不安」と、少なくともその一面において共通する震源を持つていた可能性を、この変化は示しているように思える。

『細胞文芸』の頃の、作中人物の〈憂鬱〉の起源は、見かけ上彼らの「醜さ」にあるように思える場合が少なくない。たとえば「無間奈落」の乾治は、その「異常に発達して居た自尊心」を「顔の醜さ」という「ハンデ・キャップ」によつて「八つ裂き」にされ、「醜男の辿るべき最も賢明な道」であるという「優等生」への道を邁進するが、それが功を奏して家族の「御自慢の種」となったことに、かえつて将来への「不安」を感じ「憂鬱」になっている。「彼等と其のいとしき母」の龍二の場合もつとシンプルで、彼の「ひどい自尊心」を裏切る「兄に対する肉体的の負け目」（「瘦せて小さく、その上顔も醜かつた」こと）が「悲惨な思ひ」「憂鬱」の直接の原因となつてゐる。しかし、いずれも「階級」の問題が見え隠れしながら関わつてゐることに、気

づいておく必要があるだろう。たとえば「無間奈落」の乾治の「自尊心」の基礎となつてゐるのは、おそらく彼が「このM町一番の素封家の息子であつた」という事実である。「彼等と其のいとしき母」の方は「兄に対する肉体的の負け目」からくる「悲惨な思ひ」「憂鬱」につづいて、龍二の「惨めな学校生活」が回想され、その後先に引用した「兄も中産階級の惨めさを人一倍感じて居た」という記述がある。「兄も」とある以上、龍二の感じてゐる「惨め」さにも「階級」と関わる側面のあることは疑い得ない。彼らの〈憂鬱〉は、太宰自身の階級的な〈憂鬱〉を、それぞれのレベルで反映したものだと思われるのである。

「無間奈落」についていうと、「自尊心」と「醜さ」とのせめぎあいの中で〈憂鬱〉が生成するとともに、それと並行する形で、乾治が「風をすること」「装ふこと」によつて「家の人達を喜ばす」ことに目覚めていることも見逃せない。〈太宰治〉文学に直結していく〈道化〉のテーマが、ここで芽吹いてゐるのである。

「股をくぐる」「彼等と其のいとしき母」においては、前稿から着目してゐる〈太宰的イロニー〉の成長が見られる。強／弱、中央／周縁、大／小、勝／敗など、一般的に前者に価値がおかれがちな二項対立において、あえて後者に可能性を見出そうとする姿勢をとることを、前稿では〈太宰的イロニー〉と呼んだが、中学時代の太宰の習作では〈服装〉系のテーマにおいていくらかその萌芽が見られる程度で、むしろ前者の価値を素朴に信仰する傾向の方が目立つてゐた。しかし「股をくぐる」の語り手は、「屈辱」をバネにして「將軍」に「出世」することを良しとするような世俗的な価値観を皮肉に見る視座を獲得してゐる。「彼等と其のいとしき母」においては、東京／故郷という、中央／周縁系の二項対立を観察することができる。五十嵐誠毅『太宰治〈習作〉論』は、この作品において「〈田舎〉はマイナス価値」とさ

れているというが、それは主人公の龍二の視点に寄り添いすぎた見解であろう。龍二は、確かに母が「田舎者」にみえるのを「恥かしい」と思い、母の「方言」を「憎悪」してもいる。しかしながら語り手は、「東京」を「武蔵」と呼び、東京育ちの龍二の言葉を「武蔵訛」と呼ぶ視点を持つている。それは中央にプラスの価値を、周縁にマイナスの価値を配置するような、単純な視点とは決定的に異なっている。周縁にあえて価値を見出そうとする姿勢はまだ見られないにせよ、中学時代の習作、たとえば「地図」からは、確実に歩を進めていると言えらる。

四 新聞雑誌部の頃

昭和三年九月、『細胞文芸』を第四号で廃刊にした後、太宰は、十月一日付で弘前高等学校新聞雑誌部委員となり、その創作活動の主舞台を弘前高等学校『校友会雑誌』および『弘高新聞』にうつしている。翌年十二月、新聞雑誌部が解散するまでの間に、『校友会雑誌』には「此の夫婦」（昭和三年十二月、津島修治）「虎徹宵話（改稿版）」（昭和四年十二月、小菅銀吉）の二作品を^{註1}、『弘高新聞』には「鈴打」（昭和四年二月、小菅銀吉）「哀蚊」（昭和四年五月、小菅銀吉）「花火」（昭和四年九月、小菅銀吉）の三作品を、それぞれ発表している。また、『細胞文芸』廃刊後の昭和三年十月には同人雑誌『狷騎兵』にも参加しており、翌年八月発行の第五号に、「虎徹宵話（初稿版）」（小菅銀吉）を発表している。他に、創作以外のこの時期の文章として、『校友会雑誌』には「先づ図書室を見舞ふ」（昭和四年二月、銀吉）「編輯後記」（昭和四年十二月、小菅）を、『弘高新聞』には「文芸時評―十月の創作」（昭和四年十月、大藤熊太）を発表している。

この頃、弘前高校の新聞雑誌部は、「校内左翼細胞の拠点」（相馬正

一『評伝太宰治』^{註2}）であったと言われており、新聞雑誌部委員となったのを一つの契機として、太宰の左傾は漸く本格化していくこととなった。それに拍車をかけたのが、昭和四年二月に発覚した弘前高校校長の公金無断流用に端を発する同盟休校事件である。この事件は、「終始新聞雑誌部にリードされて進展した」^{註3}。それで、新聞雑誌部の一員としてそれを体験した太宰の作風は、それを「契機」に「大きく左へ旋回していくことになった」と言われている（相馬正一『評伝太宰治』）。

ちなみに、太宰の高校時代は、昭和二年の金融恐慌から昭和四年の世界恐慌への時期に重なっている。日本は大不況下で、労働争議や小作争議が激増し、大学・高校などにおける学内闘争も激化していた。そうした状況の下、既成文学は衰退するとともにプロレタリア文学は全盛期を迎え、多くの知識人や作家が挙って左傾していた時期であったこと、また、その一方で、昭和三年の三・一五事件、昭和四年の四・一六事件など、共産党への弾圧もその激しさを増していたことを、背景として確認しておこう。

ところで、習作期の太宰の作品には、その末尾に脱稿年月日らしき日付が付されている場合が多い。「此の夫婦」末尾には「昭和三年拾月」とあり、この作品が昭和三年十月に脱稿されていたらしいことが分かる。つまり「此の夫婦」は、太宰が昭和三年九月に『細胞文芸』を廃刊し、十二月に新聞雑誌部に合流するまでの、境界の時期に書かれた作品であると言える。その過渡期的な性格は、内容にも反映していると言っているのかどうか、作者の本格的な左傾を前にして、転向を先取りしたかのような奇妙な内容の作品となっている。主人公の光一郎は、大学時代には「一端の社会主義者を気取って」「世に言ふ唯物論者」たちとも「行動を共にして居た」が、「中年の職工」と口論のあげく「てめえは、どうせプチ・ブルよ」と罵られたことが一つの

きっかけとなつて、「さし障りの無い人道主義に逆転し」た人物として描かれているのである。光一郎も例によつて「憂鬱」に悩まされる人物で、その直接の原因が妻と弟との関係への疑惑にあることは明らかだが、昔の同志である「赤城」からの彼を批判する「手紙」がその予兆として置かれていることは、彼の「憂鬱」が思想の問題と無関係ではないことを示しており、見逃せない。

「此の夫婦」は、『細胞文芸』に発表された作品と同様、プロレタリア文学ではないし、プロレタリア文学的でもない。ただ、『細胞文芸』時代の太宰が、「中産階級」くらいしか左翼用語を用いていなかったのに比べると、「此の夫婦」では、光一郎が転向者として描かれていることもあつて、「唯物論者」「社会主義者」「プチ・ブル」「唯物論的弁証法」「自己清算」などの言葉が用いられるようになっていく。内容的にはともかく、そうした側面においては、プロレタリア文学の影響が、徐々に色濃くなりつつあつた、過渡期の作品であることがうかがえる。

もう一点、「此の夫婦」で注目しておきたいのは、「道化」の問題である。先に、「無間奈落」において、「自尊心」と「醜さ」とのギャップが〈憂鬱〉を生成させるとともに、乾治の〈道化〉をドライブさせていることを確認したが、同様のシステムが、「此の夫婦」の光一郎の〈道化〉にも観察される。

全体光一郎は、若い時から、どうかして自分の気に食はぬ時は、喧嘩して迄それと争ふても見たけれど、そうで無い限りは出来るだけ人を楽しがせたい、といふ変な趣味を持つて居た。別にこうといふ野心もないのに、人の気嫌を伺つたり、人を慰めたりするには実にそつが無かつた。友達から洗練された男だのなんだのと言ひ囃されて、「そう言へば——」なんて本気に自惚れて見た

事も確かにあつた。時々は我と吾身中に介在する幫間的分子にうんざりして甚だ参つて了ふ事もあつたが、とにかく此の趣味の依つて来る所は、自分の人一倍強い勝気の裏側に、いつもこびり附いて離れないうら悲しき弱気であるとは、十も合点百も承知だつた。

すなわち、ここでは、「強気」と「弱気」とのギャップが、光一郎の「幫間的分子」(道化)をドライブさせているのである。

次の「鈴打」でテーマになつているのは、「道化」の悲哀とでも言うべきもので、光一郎のテーマの一面を忠実に引き継いでいる。それとともに、この作品で注目されるのは、達者な一人称の語りで、続いて発表された「哀蚊」では、中学時代の生硬なそれから完全に抜け出し、習作期の〈私語り〉として、ほぼ完成型に達していると言つてよいだろう。

「哀蚊」はまた、プロレタリア文学的な「目的」が、初めて作中で語られた作品でもある。

(略)なぜ百万長者のお家では悪巧(わるたくみ)をしねばならぬかを先づ考へて御覽遊ばしませ。そして又私が只今、物語りまする幽霊も、なぜそれがドロドロ現はれなければならなかつたかを研究遊ばしませ。私がこの物語りをなすのも、つまりは其れが目的(めあて)なのでございませうから。

つまり、なぜ「百万長者」(ブルジョアジー)は「悪巧」をせざるを得ぬのかという階級問題を聞き手(読者)に考えさせることが「目的」だというのである。もつとも、この物語で彼が実際に語つてしまつているのは、「婆様」に象徴される滅びゆくものの美しさとそれへの共

感であつて、引用部の前後は、この物語の中で、完全に浮き上がつてしまつてゐる。

「虎徹宵話（初稿版）」は、脱稿されたのは「哀蚊」よりも早かつたようだが、雑誌の発行が遅れたため、発表は後になつた。相前後して書かれ、発表された「哀蚊」と、明らかに基本的なテーマを共有してゐる。すなわち、一方では、「新撰組」の「男」の視点から、「時勢」にのつた「勤王の同志」たちの「主義」の優越性、「一人一人の眼前の利益を目的としない強味」が、自分たち「新撰組」の「明日にも殺される命」という滅びの覚悟とともに語られてゐる。ここに階級闘争の喩を見ることは容易だろう。その一方で、この作品の語りからは、「哀蚊」と共通する、滅びゆくものの美しさやそれへの共感が、濃密に感じとれるのである。

このあと「虎徹宵話」は改稿され、ふたたび発表されることとなるのだが、その改稿の過程に、これまでの研究では、太宰の左傾の本格化が指摘されてきている。初稿版発表から改稿版発表までの間に発表された「花火」「文芸時評」の内容も、この時期、太宰の左傾が本格化したことの傍証となるだろう。これら二つの文章は、太宰の左翼的な文章の中でも、最も先鋭的なものだとと言えるからである。

まず、「花火」から見よう。「花火」は、その青少年期の大半を「ブル的环境」に過ごしたという「僕」が、「生抜のプロ」である同志の「君」に、メーデーの合図の花火を待つ間、花火にまつわる思い出話をする、という形式の作品である。その思い出話をする目的を、「僕」は次のように語つてゐる。

(略) 僕の思ひ出話をこう考へたらどうだらう。つまり金持ち共の生活の無内容を極めて野蛮に暴露したものと考へるのだ。勿論僕は常に僕の思ひ出を最も赤裸々に少しの粉飾も施さずに、さ

らけ出してふて居るよ。それを君達が聞く、又僕自身も聞く。そして我々は結局彼等より優れた階級であることを自覚する。そうだ、我々の階級意識を愈々確乎たるものにするんだぜ。どうだい。聞いてお呉れ。いゝだらう？

「金持ち共」（ブルジョアジー）の「生活の無内容」を「暴露」すること、「階級意識」を「確乎たるものにする」という目的は、ほぼ「哀蚊」と方向性を同じくしている。さらに「哀蚊」では、語り手と聞き手の位置取りが不明確であつたのに対し、「花火」の「僕」と「君」は、メーデーに参加する階級闘争の同志であることが明確にされてゐる。「僕」の語る「思ひ出」の内容とは、「放蕩」の末に「脳梅毒」で「狂人」となつた「兄」が、「小間使」の「竹や」に病を「感染」させて死に追ひやり、その供養のために「竹や」の弟のいるらしき「安来節」の一座のために花火を上げさせた、というものである。

……あゝ、それだけの話さ。でも僕はあの時の花火の音を思ひ出すと何とも言へず不愉快になるのだ。なぜだか色々考へて見たが、始めは、兄貴の虫のよさ、つまり、人間一匹殺して置いて花火十発で、いかに狂人だとは言へ功罪相殺したと思つて居るらしい其の虫のよさ、それが嫌でこんなに不愉快になるのかと思つて居たのだが、そうでは無かつたのさ。やはり僕が、こんな……要するに有閑階級の人々の遊戯的なナンセンスを鳥渡でもしみじみした気で眺めて居た、その僕自身のプチブル的なロマンチズムに気が附いて、堪らなく不愉快になるのだといふ事が此頃やつとわかつて来たのだ。……………

先に「哀蚊」「虎徹宵話（初稿版）」が滅びゆくものの美とそれへの共

感を描いていることを確認したが、ここで「僕」はそうした美意識を「プチブル的なロマンチズム」として切斷しようとしている。より以上に先鋭的であるとする所以だが、「病氣」になってからの兄を「凄じ程美しくなつた」、「あの物妻さはまだ忘れもせぬ」という彼が、本當にそうした感性を切斷し得ているのかどうかは疑わしい。また、ここで階級的な〈憂鬱〉を解消するためにとられている戦略は、滅びる側から滅ぼす側への移動であると考えられるが、先の引用部を見ても分かるように、その移動には何とも言えないかかわしさが感じられる。「僕の思ひ出話」を「君達が聞く、又僕自身も聞く。そして我々は結局彼等より優れた階級であることを自覚する。」「僕の思ひ出話」を「僕自身も聞く」という奇妙な表現を軸にして、本来は「彼等」であつたはずの「僕」は、「君達」と共にするりと「我々」「優れた階級」に滑り込んでいるのである。こうすることで、たしかに〈憂鬱〉は解消するかも知れないが、より以上の矛盾を抱え込んでしまう結果となりかねないだろう。「竹や」の死の場面においては、「怪奇美」（「無間奈落」への志向が露骨に見受けられるという点をも含めて、「花火」は、思想の先鋭化と共に種々の矛盾が露呈した作品であると言える。

一方、続いて発表された「文芸時評」は、当時の太宰の思想の先鋭化を素朴に反映しており、これまでも指摘されてきているように、プロレタリア作家（戦旗派、文戦派問わず）には概ね好意的で、それ以外の作家には、同伴者作家をも含めて、極めて手厳しい評価を下している。

さて、話を「虎徹宵話（改稿版）」に戻そう。初稿版にくらべ、改稿版では、「新撰組」の「男」が薩長の勤王の志士たちについて語る部分が、大幅に加筆されている。「正しい眼」^{注12}で「事実」を見れば「昨日の善は今日の悪であり得るといふ事」がわかる、したがって「世の中」を「土台から建て直」すことが必要であり、「素晴らしいどんで

心返し」が起ころのは当然だという発言、「奴等」（薩長の勤王の志士たち）の「思想」「方針」は「統一されて居る」という「強味」を持つていふという発言などが、たとえばそうだ。「正しい眼」を前衛の眼、「どんでん返し」を革命、「統一され」た「思想」「方針」を左翼陣営のそれとして読み替えれば、初稿版からの思想的先鋭化は明らかだろう。ただ、初稿版がその中心に持っていた、滅びゆくものの美とそれへの共感というテーマは、改稿版ではうまく処理し切れておらず、作品として迷走してしまつていふ印象は否めない。たとえば改稿版では、「茶屋の女将」である「おせい」に、心の中で「新撰組」の「男」を批判させることでその存在感を相対化し、逆に末尾に登場する「覆面の男」（勤王の志士）を美化するという方向で、改稿がなされている。ところが、依然として最も印象に残るのは「殺されるのを待つてゐる」という「新撰組」の「男」の姿で、改稿の効果は、初稿版よりもいづらかその印象を不鮮明にしたという程度のものでしかないからである。

「虎徹宵話」改稿の過程や、その間に書かれた「花火」から見えてくるのは、思想の先鋭化が「怪奇美」志向や「滅びの美」への共感と軋みをたてつつ迷走する姿である。また、マルキシズムとの出会いがもたらした〈憂鬱〉を処理するためにとられたと見られる、〈滅びる階級〉から〈滅ぼす階級〉へと移動するという「花火」の戦略も、より以上の矛盾を抱え込む結果になることは明らかで、はつきりと破綻していた。「虎徹宵話」（改稿版）を脱稿した昭和四年十月十八日の時点で、太宰とその文学は、先の見えない深い霧の中で、行迷つていたように思える。

五 『座標』の頃

太宰が所属していた弘前高等学校新聞雑誌部は、左翼的色彩が濃厚になったことで学校当局に警戒され、『校友会雑誌』第十五号発行（昭和四年十二月十五日付）直後に解散を申し渡された。同時に『校友会雑誌』も無期限休刊となり、太宰は創作発表の舞台を『座標』にうつすこととなった。「虎徹宵話（初稿版）」を発表した同人雑誌『獵騎兵』が、青森県下の文芸同人誌を糾合した『座標』に合流することになったという事情がその背景にはあった。太宰は『座標』に、「地主一代」「学生群」の二長編を、いずれも「大藤熊太」の筆名で連載し、「地主一代」は連載第三回目で、「学生群」は連載第四回目で、それぞれ中絶している。

「地主一代」の連載第一回「序章 花火供養」は、昭和五年一月一日付発行『座標』創刊号に発表された。大地主の手記という体裁をとったこの作品は、大地主の視点から小作争議を描くことで、逆説的にその悪行を剔抉することを基本的なねらいとしている。興味深いことに、「序章 花火供養」は、前半では「哀蚊」をほぼそのまま引き、後半では「花火」とほぼ同素材のエピソードを扱っている。ただ、「哀蚊」は大地主が戯れに書いた創作という設定となり、「花火」のエピソードも大地主である「兄」の立場からの語りとなっているので、それに伴う細かな変更がなされている。この変更は、端的に言って、〈滅ぼす側〉の視点から〈滅ぼされる側〉の視点への、語りの視点の変更であるといつてよいだろう。具体的には、「哀蚊」では、先に引いたこの物語を語る「目的」^{めあて}に関わる記述が削除されている。これによって、語り手の、「婆様」に滅びゆくものの美を体現する存在への共感がより鮮明となり、作品としての完成度は上がっているが、そのことは逆に、この作品における左翼文学的な要素が〈異物〉に過ぎなかったことを明らかにしてしまっている。一方、「花火」のエピソードでは、この段階ですでに、大地主の一人称の語りに左翼文学的なテーマを盛

り込むことの困難が露呈している。というのも、ここでは大地主の「私」が看護婦の「瀬川」に「性病」を「感染」させて死に追いやつた経緯が自己正当化を交えつつ語られているのだが、「私」の自己正当化があまりにも巧妙だと作品のねらいが伝わりにくくなるし（地主を弁護しているように誤読される可能性が増す）、逆にそれがあまりにも見えすいた稚拙なものだと作品そのものが馬鹿馬鹿しくナンセンスなものに見えてしまうからだ。〈滅ぼす側〉から〈滅ぼされる側〉への視点の移動は、「花火」における〈滅ぼす側〉からの語りや「虎徹宵話」改稿における〈滅ぼされる側〉から〈滅ぼす側〉への重心の移動において行きづまっていた状況を打開するための方策であったと考えられるが、問題は解決されるどころか、ますます混乱の度を深めているのである。

太宰が「序章 花火供養」を脱稿したのは、昭和五年十二月九日のことのようにだ。その翌日深夜、彼は、下宿で多量のカルモチンをのみ、昏睡状態に陥っている。この自殺未遂事件の直接の動機は未だによく分かっていないが、太宰自身は、例えば次のように語っている。

プロレタリア独裁。

それには、たしかに、新しい感覚があつた。協調ではないのである。独裁である。相手を例外なくたたきつけるのである。金持ちには皆わるい。貴族は皆わるい。金の無い一賤民だけが正しい。私は武装蜂起に賛成した。ギロチンの無い革命は意味が無い。

しかし、私は賤民でなかつた。ギロチンにかかる役のはうであつた。私は十九歳の、高等学校の生徒であつた。クラスで私ひとり、目立って華美な服装をしてゐた。いよいよこれは死ぬよりは無いと思つた。

私はカルモチンをたくさん嚥下したが、死ななかつた。（苦惱

の年鑑」昭和二十一年六月)

はるか後の、しかも改めて「革命」に追い風が吹いていた時期の文章なので、それなりに割り引いて読む必要がある。しかし、自身が「ギロチンにかかる役のはうであつた」ことが高校時代の「憂鬱」の成因となっていたことは、おそらく疑えない。そして、すでに見てきたように、彼は、そうした問題を昇華するための重要な手段であつたと思われる創作活動において、乗り越えたい壁にぶつかっていた。思想がもたらした、創作へと昇華しきれない思いが、自殺として行動化したというのが、習作の流れを分析したときに見えてくる、この自殺未遂事件の基本的な姿であるように思う。

ところで、ここで身を捨てた体験は、創作の面について言えば、直面していた壁を乗り越えるための一つの大きなきつかけとなつたように考えられる。私なりにその経緯を整理しておく、おそらく次のようになるだろう。マルキシズムとの出会いが、太宰とその文学に「憂鬱」をもたらしたのは、自らが所属する階級が滅ぼされるべき階級であつたからだということも勿論あるだろうが、それ以上に、その「滅び」が自ら望んだそれではなく、意想外のところから降りかかつてきたものであつたからだろう。追いつめられて自ら死を選んだという体験は、そんな彼に、本来は選択の余地なく降りかかってきたものであつたはずの「滅び」を、あえて自らの意志で選びなおすという戦略を思いつかせたのではないだろうか。つまり、あえて「滅び」を選びさえすれば、つねに滅びゆくものとの美とそれへの共感へと傾斜していく自らの文学の志向を満足させると共に、滅びるべき階級のものが滅びるといふ意味で、自らの思想をも満足させることができる。両立しがたかつた志向を、両立させうるのである。

もちろん、太宰がこの順序で考えたわけではないだろうし、戦略を

意識したわけでもないだろう。ただ、作品そのものの基本的な構想を破りながら、「地主一代」がたどり着いた場所を見ると、そこから逆に、太宰文学がもがきながら生み出しつつあつた戦略が、今述べたような形で、透けて見えてくるように思うのである。順に確認しておく、この作品の基本的な構想とは、先述したように、大地主の視点から小作争議を描くことで、逆説的にその悪行を剔抉するというものであつた。この構想がジレンマを孕んでいたこともすでに述べたとおりだが、いくら作品が稚拙なものに見えてしまおうと、作品が所期の効果をあげうるために最低限必要なのは、語り手の地主がわかりやすい「悪」でありつづけることであつたと言える。ところが、第二章に入ったあたりから雲行きがあやしくなりはじめ、「私」は小作人を批判する母の言葉に違和感を感じ、小作人側に立つ弟の言葉に内心「そこかも知れん」と共感して、そういう自分自身に狼狽している。そこにおいて「私」は、「奇蹟的な人格の分裂」のために、画に描いたような悪人ではなくなりつつあつたのだ。そして最後には、「地主が強いのか、小作人が勝つか、この歴史的に記念すべき大決戦が、ここ数日で定まるのです。必死になつて闘つて見ませう」という弟に対し、次のように言い放つに至っている。

『言ふ迄も無い事だ。俺は覚悟をして居る。俺は俺の全財産を投げうつて迄も此の争議には勝たねばならないのだ。俺は新興の力を挫く為に生まれて来たのだ。それが俺の天命なのだ。近頃やつとそれが判つて来たやうな気がする。此の天命に甘んじて、一生憎まれ役をつとめて居るのこそ、何よりも英雄的な華々しい人間らしい生き方だと思ふのだ。此の苦しい悲壮な任務に踏みとどまり得ず、他の仕事にコソコソ逃げて行くお前達こそ本当の卑怯者なのだ。まあ、とにかく命を賭けて闘つて見やう。戦ひが済んだ

ら又ゆつくり合はう』

ここでの「私」は、すでに分かりやすい悪徳大地主ではない。彼はあえて「憎まれ役」という「苦しい悲愴な任務」をつとめることを選び、そしてそれが「何よりも英雄的な華々しい人間らしい生き方」であると信じようとしている。こうした姿勢は、のちの〈太宰治〉文学でとられているそれと、ほとんど見紛うばかりである。「虚構の春」（昭和十一年七月）「姥捨」（昭和十三年十月）を例として引いておこう。

『職人ふぜい。』と嘔んで吐き出し、『水呑百姓。』と嗤ひののしり、さうして、刺し殺される日を待つて居る。（略）私は派手な衣服を着る。私は甲高い口調で話す。私は独り離れて居る。射撃し易くしてやつて居るのである。私の心にもなき驕慢の擬態もまた、射手への便宜を思つての振舞ひであらう。（一行あき）自棄の心からではない。私を葬り去ることは、すなはち、建設への一歩である。この私の誠実をさへ疑ふ者は、人間でない。（「虚構の春」）

私は、歴史的に、悪役を買はうと思つた。ユダの悪が強ければ強いほど、キリストのやさしさの光が増す。私は自身を滅亡する人種だと思つてゐた。私の世界観がさう教へたのだ。強烈なアンチテーゼを試みた。滅亡するものの悪をエムフアサイズしてみせればみせるほど、次に生れる健康の光のばねも、それだけ強くはねかへつて来る、それを信じてゐたのだ。私は、それを祈つてゐたのだ。私ひとりの身の上は、どうなつてもかまはない。反立法としての私の役割が、次に生れる明朗に少しでも役立てば、それでは、死んでもいいと思つてゐた。（「姥捨」）

「地主一代」は、その最終場面において、〈滅び〉をこそ選択し、そこに可能性を見出そうとする〈太宰的イロニー〉を、ほとんどのちの〈太宰治〉文学と変わらない形で、成立させていたのである。

このあと、「私」が弟の差しのべた右手を堅く握り、「生れて初めて肉親の愛を掌の中にぬくぬくと感じ」る、という場面で「地主一代」は中絶している。生家からの要請があつたというが、たえそうでもなくとも、この作品がここで弥縫しようもなく破綻してしまつてゐることは明らかだろう。地主／小作人の対立が作品の軸になるはずであつたはずなのに、それがいつのまにか兄／弟の対立に矮小化され、さらにはその対立さえ「なしくずしに無化」^{注三}されてしまつてゐるからである。これはもはや、プロレタリア文学ではあり得ない。紛れもない〈太宰治〉文学の世界が、そこには立ち現れようとしているのである。

さて、「地主一代」の第二回は『座標』第三号（三月一日付発行）に、第三回は『座標』第五号（五月一日付発行）に、それぞれ発表されているが、その間に太宰は弘前高等学校を卒業し、東京帝国大学文学部仏蘭西文学科に進学していた。上京してすぐに、同郷同窓の先輩である工藤永蔵の訪問を受け、その徳懋もあつて、学内の左翼系の讀書会に参加したり左翼組織への資金援助をしたりするなどの本格的なシンパ活動を始めるようになった。高校時代の太宰の左傾はあくまで観念的なものであつたが、大学進学後のそれは、實際行動を伴うものとなつていったのである。

「地主一代」が中絶された後、太宰は、七月から「学生群」の連載を開始した。高校時代のストライキ事件に取材したこの作品は、すでによく知られているように、太宰の同級生であつた石上玄一郎の証言によると^{注四}、まだ事件の記憶が生々しい昭和四年中に、その初稿が書

かれていたらしい。初稿「学生群」と『座標』連載版「学生群」との関係について、相馬正一「初期習作」は次のように述べている。

現在のところ昭和四年に「学生群」を確認したのは石上だけであるが、上京直後に「学生群」の朗読を聞かされた人は太宰を左翼運動に勧誘した工藤永蔵ほか数人いる。石上をも含めてそれらの人々の話を総合すると、「座標」発表前の初稿は現存の〈四、生徒大会〉までであつて、〈五、彼等〉〈六、スパイ〉〈七、裏切者〉は書かれていなかったようである。しかも、〈五〉の中の〈C、敗惨者〉は太宰自身をモデルにした箇所、後年「葉」の断章の中にも部分的に取り上げられているが、朗読されていれば当然その箇所が話題になるはずなのに、発表されるまで知らなかったという。このような事情から推して、「地主一代」に代るものとして取りあえず「学生群」の初稿を掲載したものの、途中からこれの改竄を思い立ち、それまで特定の主人公を置かず学生群像をかなり客観的に描いてきたこの作品に、太宰自身をモデルにした青井青年を登場させることにしたものであろう。

相馬論を踏まえて、「四、生徒大会」までが初稿を踏まえた部分、「五、彼等」以後を「地主一代」以後に加筆された部分だと仮定することにしよう。この作品の基本的なねらいは、タイトルにも直截にあらわれているように、「学生」を「群」として描こうとする、プロレタリア文学由来の集団描写にあつたと思われる^{註十五}。「地主一代」の第二章で、太宰文学は明らかにプロレタリア文学の範疇からはみ出していたが、その後に加筆されたと見られる「五、彼等」以後の部分で興味深いのは、冒頭部からプロレタリア文学を相対化する視線の芽生えが観察でき、さらにはそれが左翼的な政治活動におけるプロレタリア文学の第

一義的な存在意義そのものの否定にまで及んでいるということである。まず、「五、彼等」の「(A)家(ストライキ第一日)」冒頭部を見よう。ここで「P製材会社の社長の一人息子」である「吉野」は、昼休みに「笑い興じ」ている「職工」たちの「和気藹々たる風景」を見ながら、次のように考えている。

プロレタリア小説なんかを読んで見ると、何処の工場も皆もつともつと陰惨で、職工は悉く理智的であつた。そしてよくストライキを起した。それに引きかへ、彼の工場は実にくだらなかつた。あまりの平凡さに堪忍出来ず、時々工場へ行つて密かに彼等の反抗心を煽動して見たり等した事もあつたが、結局男工の方からは怖がられ、女工からは色目を使はれる位がおちであつた。今ぢや彼は、此の工場を日本一の愚劣なものだとして、すっかり諦めて了つて居るのだ。

ここには、その目的に殉じるために現実から遊離し、あまりにも都合主義的に作られている「プロレタリア小説」への、批評的な意識が伏在していることが観察できる。

さらに「五、彼等」の「(C)敗惨者」では、「地方の大地主の息子」でありながら「マルキシスト」でもある「青木」が、一時は「P高の芸術運動の先鋒」でありながら、最近になって芸術運動を放棄することになった経緯が、次のように描かれている。

芸術運動は、階級闘争の輝ける逃避場である。芸術は、殊に文学は決して革命家を養成し得ない。浪漫的な、随つて没落の見えすいた革命家のみ作る。(略)幾百回幾千回となく試みられながら、未だ一回も成功しなかつた企図。プロレタリアに読ませるプ

ロレタリヤ小説。こんな皮肉な事実はあるか。インテリにはインテリに読ませるプロレタリヤ小説しか書けない。之は恥しながら事実だ。(略) 尊敬すべきさる闘士が言ふ。

『今のプロ作家達は、あんなインテリ臭いプロ小説なるものを百篇書く事によつてでは無く、其の稿料を我々に寄附する事によつて階級的に存在の意義がある。(略)』

それからレニンの功利性一点張りの芸術論。しかも其の芸術論は全然正しい。だが同時に青井には到底堪えられん。

青井は、そうして芸術運動を潔く放棄した。

ここで、「プロレタリヤ小説」は、「階級闘争」におけるその第一義的な存在意義を否定されるに至っている。

「地主一代」「学生群」は、いずれも太宰の、プロレタリア文学からの逸脱を示す作品で、当初の構想やねらいから大きく逸れていったことが、連載中絶の内在的な理由であったろうと考えられる。「学生群」の連載も、「(C) 敗残者」を含む第三回目分の発表の後、十月は「病気のため」ということで休載し、その翌月に第四回目分を発表するが、そのまま中絶されることとなった。

ここで太宰には二つの選択肢があったはずだ。一つは、「地主一代」でたどりついた地点から、たとえそれがプロレタリア文学の範疇に入らないとしても、創作において自らの美意識と思想とを両立させる道を模索すること、今ひとつは、創作活動はあくまで二義的なものであるとして、それよりも政治活動を優先すること、である。この時点での太宰は、後者を選択した。その結果、昭和五年九月から十一月にかけて、太宰は、少なくとも主観的には、「純粋な政治家」「若き兵士」としての一時期を過ごすこととなった。

六 おわりに

さて、最後に、前稿で述べたことも含めて、習作期の太宰治文学の流れを振り返っておこう。

はじめに確認したように、中学時代の太宰は、少なくとも内面／外面系のテーマにおいては、〈太宰治〉への飛躍のきっかけをつかみかけていた。そして、近代文学において重視されがちな内面ではなく、あえて外面を重視しようとするイロニカルな姿勢が、次第に拡張されていく過程において、すなわち、〈太宰的イロニー〉が完成されていく過程において、作家〈太宰治〉が誕生することになったのではないか、というのが前稿末尾で提示した見通しであった。

本稿では、高校に進学した太宰の文章に、中学時代にはなかった〈憂鬱〉が生み出されていることに着目し、それが、マルキシズムとの出会いによって生み出されたものではないかと推定した。太宰の所属する階級が、マルクス主義思想から見れば、滅びるべき階級であったからである。この〈憂鬱〉を、作品として昇華するために、太宰は試行錯誤を繰り返すが、最終的に行きづまってしまい、行き場を失った〈憂鬱〉は、自殺として行動化されることとなった。この自殺未遂をきっかけとして、太宰は、「地主一代」の末尾で、あえて滅びを志向するという戦略を、おそらく手に入れている。私の考えでは、これが、中学時代の外面志向に続く、〈太宰的イロニー〉成立のための、第二のステップであった。つまり、一般的には前者に価値があるとされがちな栄え／滅びという二項対立において、あえて後者を志向し、そこにこそ可能性を見出し、いこうとする戦略が、そこでは創出されていたと見るのである。

しかし、そのあと太宰は、先に見たように、政治活動の世界に身を

投じることとなり、昭和八年二月に〈太宰治〉という筆名で作品を発表しはじめ、二年あまり、ほぼ完全に沈黙をつづけている。そのころに書かれたものとしては、俳句や連句、それに小品「ねこ」が残されているのみである。「魚服記」「列車」「思い出」などの原型も書かれていたはずだが、それらの草稿は残されていない。

この沈黙の時期に、太宰が〈太宰治〉へと飛躍する、第三の、そして最後のステップがあつたはずだ。私はそれを、中央／周縁（東京／ふるさと）という二項対立において、周縁（ふるさと）へと向き直ったことだと考えている。というのも、太宰が沈黙期に用意し、〈太宰治〉として発表した初期作品は、いずれも何らかの形で〈ふるさと〉を志向しているからだ。しかし、この問題について論じるとは、すでに本稿の守備範囲をこえている。この沈黙の時期に、太宰の生活史に起こった二つの大事件との関わりも含めて、別稿を期することにした。

注

※太宰治の習作の引用は、基本的に平成十一年二月二十五日付発行『太宰治全集』第一巻（筑摩書房）に拠っている。また、太宰の伝記的事実については、山内祥史「年譜（平成十一年五月二十五日付発行）『太宰治全集』第十三巻（筑摩書房）・平成四年四月二十四日付発行『太宰治全集』別巻（筑摩書房）、相馬正一「評伝太宰治」（全三部、昭和五十七年）昭和六十年、筑摩書房上下巻、平成七年、津軽書房）・若き日の太宰治』（昭和四十三年、筑摩書房）平成三年、津軽書房）をはじめとして、先学の業績に多くを負っている。

注一 平成十八年四月『大分大学教育福祉科学部研究紀要』第二十八巻 第一号

注二 前稿でも述べたとおり、習作期の太宰については、本名である津島修治や、それぞれの作品で用いていた筆名（辻島衆二、小菅銀吉、

大藤熊太など）で呼ぶのがより正確だと思われるが、混乱を避けるため、ここでは太宰治という呼称に統一し、太宰治という筆名を用いたところの太宰を特に区別して指示する必要がある場合は、山括弧を付して〈太宰治〉と表記している。

注三 この英作文の執筆時期には若干の疑義がある。山内祥史「解題」（筑摩書房『太宰治全集』第十二巻、一九九一年六月二十日付発行）は、それぞれの英作文の執筆時期を、太宰のノート記載順に、「KIMONO」は「昭和二年四月下旬」、「The Real Cause of War」は「四月下旬から五月上旬までの間」、「What is Real Happiness?」は「五月上旬」、「Are We of To-day Really Civilised?」は「五月中旬頃」、「Should the Sake of Alcoholic Beverages be Restricted?」は「五月中旬から下旬までの間」、「The Ainu」は「五月上旬」、「My Holiday」は「六月上旬」、「A Walk in the Hills in Autumn」は「六月上旬から中旬までの間」、「A very brief history of his first half life. (Not biography, because he has still his future.)」は「六月中旬から下旬までの頃」、「Bushido」は「六月下旬頃」であろうと推定している。私はノートの現物を見ていないので、あくまでタイトルと内容からだけの単純な疑問なのだが、「My Holiday」以後は、夏休み明けに書かれたものではないだろうか。というのも、この英作文には今年の夏休みに東京の兄のところに行つたという体験が書かれていしか読めないからである。その次に書かれている「A Walk in the Hills in Autumn」も、六月に出された課題だと考えるよりは、夏休み明けに、つまり秋（＝Autumn）に出された課題だと考えた方が筋が通りはしないか。となると、ノートのその後に記載されているという「A very brief history of his first half life.」や「Bushido」も、それ以後に書かれた蓋然性が高いのではないだろうか。

注四 「doubtful」をどう訳すのが適当か困惑するが、「無間奈落」には「he is attacked by doubtful melancholy」をほぼそのまま訳したような「彼は又例の得態の知れない猛烈な憂鬱に襲はれた（略）」という一文が出て来る。これをヒントにする「doubtful melancholy」は「得態の知れない」「憂鬱」という意味であると考えられる。

注五 『細胞文芸』第三号（昭和三年七月）に発表された比賀志英郎「彼

を、太宰の作品とする説もある。相馬正一「太宰治・十九歳の習作」彼の検証」（平成十五年九月『新潮』第百卷第九号）参照。

注六 昭和四十九年『作品論太宰治』双文社出版

注七 平成六年『太宰治事典』学燈社

注八 平成六年『太宰治事典』学燈社

注九 平成七年三月二十五日付発行、翰林書房。

注十 『校友会雑誌』第十四号（昭和四年三月）に発表された比賀志英郎「哀れに笑ふ」を、太宰の作品とする説もある。相馬正一「哀れに笑ふ」の検証」（平成十六年七月『新潮』第百一卷第七号）参照。

注十一 引用は、津軽書房版『評伝太宰治』上巻（一九九五年二月二十日付発行）による。

注十二 昭和四年は、『戦旗』派（ナツプ派）が文壇を制覇した時代であったが、その指導的な理論家であった蔵原惟人は、「プロレタリア・レアリズムへの道」（昭和三年五月）において、「即ち、第一に、プロレタリア前衛の「眼をもつて」世界を見ること、第二に、厳正なるレアリストの態度をもつてそれを描くこと——これがプロレタリア・レアリズムへの唯一の道である」と主張していた。「虎徹宵話」（改稿版）の「正しい眼」という表現は、蔵原の「前衛の眼」を意識した表現であるように思える。

注十三 安藤宏「哀駭」の系譜」（昭和六十三年七月七日付発行『太宰治』第四号、洋々社）

注十四 「弘高時代の太宰」（昭和二十四年四月、八雲書店『太宰治全集』附録第七号）、「石上玄一郎氏に聞く」（昭和四十九年二月『国文学』など）。

注十五 直接的には小林多喜二「蟹工船」（昭和四年五月・六月『戦旗』）に影響を受けた可能性が高いように思う。従来、「学生群」初稿の成立は、石上玄一郎の証言を受けて、昭和四年春とされることが多かったが、「蟹工船」を意識したとすれば、もう少し後に下がることになる。

On Dazai Osamu's Literature in His High School Days

FUJIWARA Kosaku

Abstract

The major target of this research is studies of Dazai Osamu at high school days. It was the second step of him to have selected ruin there.

【Key Words】 Dazai-Osamu, Studies, High-School-days, University-days

平成十八年五月二十九日受理
ふじわら・こうさく